

邢定康著『守望南京・民国旅游尋尋覓覓 (南京を見渡す・民国観光探索)』

Travel Stories of Nanjing in 1912-1949

張 慧娟

一 はじめに

本書は、1912年から1949年までの中華民国期（以下、民国期と称する）における南京の観光事情を論じたものである。評者の知る限り、民国期における観光について、中国の学界で今まで多くの研究がなされてきたのは、中国旅行社についてであろう⁽¹⁾。それ以外の分野に関しては、本格的な研究がなされてきたとは言い難い。その一つの原因は、本書の著者である邢定康氏が指摘した通り、民国期の観光に関する既存文献が少ないことであろう。それゆえ、邢氏も『江苏省志・旅游業志』の南京市部分及び『南京市志』の観光部分の編集に苦労したという思いがあった。その後、邢氏は公務を引退し、民間から資料を収集しながら研究活動に専念してきた。

本書は中国観光情報の隅に埋もれがちな南京の民国期の観光事情について述べられており、観光における「六つの要素」から論じた学知の一つが我々読者のもとに届けられたことは、それ自体、喜ばしいことである。本書の最大な特徴は、民国期の首都である南京における観光事情—伝統資源



『守望南京』
南京出版社／2014年2月／
194頁／38.00元

(1) 代表的な研究論文は、張俐俐 (1998) 「近代中国第一家旅行社述論」『中国经济史研究』1998年第1期。易偉新 (2009) 「中国近代旅游企業的企業文化建設研究—以中国旅行社的CIS為例—」『湘潭大学学报(哲学社会科学版)』第33卷第3期などが挙げられる。いずれにしても文献研究を中心としたものである。

に着目し、大量の史料を用いて包括的な分析を試みていることであろう。そして、民国期の観光研究に貢献することが本書の目的であった。

以下、本書の構成、本書の要訳、本書に対する書評と留意点の順に述べたい。

二 本書の構成

本書の構成は以下のとおりである。

代前言（前書き）

第一章 寻觅旅行社（旅行社探索）

第二章 何处看风景（どこで風景を見るか）

第三章 马蹄声“得”“得”（馬はパカパカ）

第四章 择宿不觉晓（よい宿でぐっすりと）

第五章 舌尖上的京城（都を味わう）

第六章 娱乐在其中（娯楽はそこにあり）

第七章 都市有物产（南京名物）

後記

三 本書の要訳

「代前言（前書き）」

前書きは、南京市旅游委員会書記金衛東による。金氏は、民国期の首都である南京市の観光活動の特徴を概観し、それに関する研究は今日における観光産業全体の発展に重大な意義があると指摘した。そして、本書の著者である元南京市旅游局副局長、現在南京旅游学会会長邢定康氏の研究実績を紹介した。最後に、現在において南京市における民国期の観光研究は極めて少ない中、邢氏が書かれた本は「抢救性的書稿（大変貴重な書物である）」と高く評価した。

「第一章 寻觅旅行社（旅行社探索）」

第一章では、まず中国旅行社及び中国旅行社南京支社の組織活動を詳細に紹介し、南京支社は江蘇省地域内で歴史上初の旅行組織であると主張した。そして、現在も使われている“旅行社”、“招待所”という二つの組織名は中国旅行社の独創したものであり、両組織とも「奉仕の精神」という経営理念を実現していたことも指摘している。また、南京におけるその他の官民観光組織及び組織活動を紹介すると同時に、当時出版された観光案内及び観光名所に関する書物も多数紹介している。

「第二章 何处看风景（どこで風景を見るか）」

第二章では、まず時間軸に沿って民国期に出版された南京観光案内を基本にし、旅程表の特徴について検討した。時の流れにより旅程表が異なるが、いずれにしても観光客の立場から合理的な旅程表を提供したという共通点があると指摘した。そして、出版された南京観光案内に関する資料とインタビューデータを中心に、南京地域における主要観光地を十か所取り上げ、現在の風景と比較しながら解説した。

「第三章 马蹄声“得”“得”（馬はパカパカ）」

第三章では、当時南京観光の交通システムを検討した。南京と外地を行き来した観光交通手段として、国道、鉄道、水路及び空港があった。市内において、1929年に北の港から東へ全長12,000メートル、幅40メートルの主幹道路が建設された。道路の両側には多数のプラタナスが植えられ、南京市のグリントンネルと呼ばれていた。市内に走っていた馬車、人力車、三輪車、バス及び「小火車（市内鉄道）」などの交通手段は観光客を各観光地まで運び、観光客の足となったということを解明した。

「第四章 择宿不觉晓（よい宿でぐっすり）」

第四章では、まず当時の旅館立地に関してその特徴と経営管理手法を概観した。その後、経営組織論の観点から旅館業界の協働組織である「南京市旅館商業同業公会」の特徴及び現在における旅館協会との相違について論じた。最後に、外国人経営の旅館を含む幾つかの旅館を取り上げ、それぞれの特徴と現状について述べた。

「第五章 舌尖上の京城（都を味わう）」

第五章では、まず南京における食文化の歴史を概観した。それから南京料理、南京の軽食及び代表的なレストランを三つの部分に分けて、それぞれの立地状況、歴史、味などを解説した。特に、第二節では南京を代表する料理“京蘇料理”についてその調理法、味、料理名などを詳細に取り上げた。更に、全章を通して南京人における食文化の背景と食習慣を検討した。

「第六章 娯楽在其中（娯楽はそこにあり）」

第六章では、南京の娯楽には秦淮画舫、劇茶ホール・遊楽場、映画館・演劇場・倶楽部及び祭りなどの活動があったことが述べられ、それらを四つの部分に分けて解説した。秦淮画舫について、画舫の種類、遊覧路線及び遊覧金額などを取り上げた。劇茶ホール・遊楽場の部分において、それぞれの立地状況、運営方式、さらに名優、名作まで細かく解説した。映画館・演劇場・倶楽部の部分では、軍用と民用が分かれていたことを解明した。最後には、南京伝統的な祭“灯会（提灯まつり）”と“菊花大会（菊展覽会）”を取り上げ、その管理組織や規模及び開催地を解説した。

「第七章 都市有物産（南京名物）」

第七章では、南京の物産を漢方・果実、板鴨・塩蔵品、南京雲錦・雨花石及び南京物産展覧会という四つの部分に分けて解説した。それぞれの部分について、産地とメーカー、販売店及び味まで詳細に書かれている。第四節では1951年に行われた南京物産展覧会は時代が異なるが、南京における民国期の物産に関する研究において参考価値があると指摘した。

「後記」

最後の部分では、著者が本書を書かれた二つの目的を詳細に述べている。同時に、利用した資料のエピソード及び協力してくれた関係者について記述している。そして、本書は民国期における観光に関する研究としてまだ初期段階であり、今後より多くの研究者がこの研究を深めることを期待すると述べている。

四 本書に対する書評と留意点

以上、本書の内容を追ってきた。本書の特徴として、第一には、使用している史料が極めて個人的であることが指摘されよう。邢氏は精力的に民間から史料を集め、それを利用している。また、従来の地方文献を加えたことにより豊富な史料群を用いている点に、本書の斬新さがあると考えられる。無論、その解釈や利用方法に関しては、なおまだ多様な切口から研究を深めることが不可欠ではあるが、それらの史料は今後の民国期の観光研究において新たな可能性を提示したといつてよいであろう。

第二には、蓄積が多くない民国期の観光研究に、本書が史料研究と実証研究（インタビュー）の流れを持ち込むことに貢献した点である。実証研究が重要であるが、今日の中国において観光地域史について史料研究は主流であろう。本書の著者は、自身の出身地である南京で民国期の旅行社関係者、料理家及び地域住民などへのインタビューのデータ、旅行関係のコレクターからの史料を含む地方性文献を収集し、それらを組み合わせることで、貴重な本を完成させたのである⁽²⁾。こうした研究手法は、この分野において極めて珍しいものであり、やはり評価すべきであろう。

第三には、民国期の南京観光事情を解明するという問題意識を持ちつつ、観光に関する「六つの要素」を用いて南京の民国期の歴史的な変遷、とりわけ中国民国期における南京地域観光の特性とそれがもたらした影響についてスケールの大きな記述を行った点である。そして、民国期における南京観光の歴史的変遷を一望のもとに見渡そうとする試みは、現在において多くはない。

第四には、本書と向き合うと、解明のスタイルに若干の違和感をおぼえる点がある。観光における六つの要素で観光事情を解明する場合、要素ごとに分け、それぞれの解明を組み立てる、という我々に馴染みのある論述方式とは異なり、第一章では、中国旅行社南京支社を中心に論じ、それが後述していく章との相互関連を示さないまま記述される。このようなスタイルでは、読者はいったい何のためにこの記述を読まされているのか、ど

(2) 評者が今年の3月に著者へのインタビューにより、この書に出されている多くの写真は旅行関係コレクターである銭長江氏から提供された実物を写真としたものである。

こに連れて行かされているのか、不安と戸惑いを覚えるのであろう。

最後に、冒頭にも述べたように、『守望南京・民国旅游尋尋覓覓（南京を見渡す・民国観光探索）』のような民国期の地域観光を解明する書物が出版されることは喜ばしいことである。それは、本書では「民国期の観光事情」の解釈に接することができるからである。民国期の南京地域は全中国の経済、文化の中心地であり、その地域の観光事情を中心に研究することは中国国内の学術界において深い意味を持つものであろう。またさらに、本書は、従来の民国期観光研究において扱いの手薄であった部分を埋めるということにとどまらず、中国観光を研究の対象とする者は言うまでもなく、中国民国期の文化を理解するすべての人々にとって貴重なものであろう。